で、相手に背中をむけるような形で、左足のかかとを、相手の左すねにたたきつけました。

照島の大きなからだは、小さな四郎を中心にして、空中高く、さかさにもちあげられたと思うと、頭からたたみにたたきつけられました。『山嵐(やまあらし)』の大技(おおわざ)です。

小さな四郎が、大きな相手をたおすために、くふうしたのがこの技でした。相手のからだがさかさまにたたきつけられるようすが、ちょうど山から嵐(あらし)が吹きおろすようだというので、嘉納治五郎(かのうじごろう)が『山嵐』と名づけた技です。

ふらふらと立ちあがった照島の、よろめくところに、四郎の『山嵐』が、ふたたびきまりました。

「まいった。」

これだけいうと、照島の意識(いしき)は、すうっと遠のいていきました。会場いっぱ